

本多静六通信

第21号

発行
本多静六博士会
を顕彰する

六甲山系のはげ山緑化と本多静六



お茶の水女子大学名誉教授 遠山 益

一 はじめに

近畿地方では二百万年ほど前に、東西方向に作用する巨大な横圧力による地殻変動が起こった。この変動によって地殻の隆起した部分が六甲山系になり、沈降した部分が大阪湾になったという。六甲山系は海拔千メートル前後の山々が東端の宝塚市から始まり、甲山・六甲山・麻耶山・再度山かたぢまへ・高取山・鉢伏山と続き、西端は神戸市塩屋に至る全長五十六キロメートル、幅二〜七キロメートルで海岸に接している。

六甲山系はその大部分が深層風化した六甲花崗岩と布引花崗閃緑

岩とから成り立っている。一般に花崗岩地帯は地下水位が低く、土壌は貧弱であるから、森林伐採などがなされると植生は容易に回復せず、土壌が流されてはげ山になり易い。六甲山系の花崗岩は風化してもろく、雨水の浸食を受け易い、いわゆるマサ（真砂）と呼ばれる砂状の岩石である。マサ化した花崗岩の岩肌が露出した部分は雨水に流され易いので、昭和十三年・同四十二年の豪雨による大災害にみられるような土石流を引き起こすことがある。



照葉樹林でおおわれた美しい六甲山系山麓の一部

うな推定年代は、地層に含まれる花粉の分析や化石の分析などによって確定することができる。こうしてみると弥生時代（紀元前三世紀から紀元後三世紀までの六百年間）から古墳時代（四世紀頃から六世紀頃まで）の間に大陸・朝鮮から渡来した稲作が盛んになるまでは、六甲山系はうっ蒼とした原始林で覆われていたと思われる。すなわち、山頂部（八百〜千メートル）にはブナ・ミズナラの森林、六百〜八百メートルにはモミ・コウヤマキ・イヌブナ・コナラなどの針葉樹と広葉樹の混交林

があり、六百メートルから山麓にはアカガシ・ウラジロガシなどのカシ類やシイなどの照葉樹林が分布していたと考えられている。

二 六甲山系はなぜはげ山になったのか

前述したように、六甲山系は花崗岩から成り、それが風化した砂状のマサ土は樹木の生育に良好な環境とはいえない。それゆえ一度伐採すると森林の回復は容易でない。手許にある資料からははげ山の原因を探ってみると以下のようである。

(一) 奈良時代（七一〇年〜七八四年）の末期、神戸の人口は約三万人といわれ、平地では莊園を中心とした集落が発達して開墾が進み、平安時代中期まで飛躍的に発展した。そのため家屋や神社仏閣などの建築材、住民の薪炭材などの需要が増大して、六甲山系の照葉樹林は次第に伐採されていった。その跡にはアカマツやコナラなどの二次林が発生して遷移したと考えられる。因みに麻耶山の天上寺は六百七十四年に、再度山の大龍寺は七百六十八年にそれぞれ建立されている。



再度山にある大龍寺の山門(弘法大師が入唐にさいして、登山して求教を祈った寺)

(二) 中世(鎌倉・室町時代)に入ると、神戸の人口は四万人以上になり、六甲山系の森林の消費は一段と加速されたと思われる。他方、源平合戦(一一八四年)から花隈城合戦(二五八〇年)までの約四百年間に、六甲山系内に築城された山城を中心に度々戦争が起こって、山中は勿論のこと、山麓部も戦場となり、軍用資材の調達や焼き打ちなどで山林の荒廃は進んだ。具体的には麻耶合戦一三三三年、松岡城合戦一三五一年、多々部城合戦一三六二年、滝山城合戦一五六六年、花隈城合戦一五八〇年などである。現在でも新神戸駅の裏山に滝山城の遺構が残っていて、当時の様子の一部を知ることができる。

(三) 豊臣秀吉が大阪城の築城

(一五八三年〜一五八五年)に際して、六甲山から石材を切り出した。その代償として「六甲山の樹木伐採勝手たるべし」との布令を出したため、永年にわたり森林伐採が横行し、はげ山化に油を注ぐ結果になったという。なるほど大坂築城時の石切り場の跡や搬出の途中で放棄したと思われる巨大な石材が、今も東六甲に沢山残っているという。これらの石材を大坂築城に用いたのは確かであろう。もし、この布令が真実であるなら、薪炭のため樹木を伐採し、肥料のため下草を刈るなど、人は自由に山林に立ち入ることから山火事も発生する。このように山林の自然回復力を上回る収奪的行為を人間は行なってきたことになる。

(四) 江戸時代中期以降、下級武士は経済的に困窮して夜なべ仕事を必要とした。そのため灯りの油(松根油)を採取するため、松を根こそぎ掘り起こした。これが表(おもて)六甲山系の山林が荒廃する原因の一つになったという。

(五) 明治維新によって幕府や藩政による森林管理制度が崩壊し、さらに明治新政府の地租改正によって入会制度が消滅した。その

ため付近住民は勝手に入山して山林の濫伐、下草刈り、枯葉枯枝の収集などを行ったので、山地の荒廃は一段と進行した。

以上のように、六甲山系の崩壊し易い地質による自然災害、さらに幕末・明治維新から明治時代中期にかけて人心や世相の不安と混乱は山林の乱伐盗伐の横行、山火事の頻発などをもたらし、山林の荒廃に拍車がかかった。その結果、普段水無川の川は大雨が降る度に土石流が急斜面を一気に山麓へ流下して大災害を引き起こした。

このような六甲山系の荒廃と災害は中世以降の人災だとする説があるほどである。明治新政府は各地の山林が荒廃する状況にかんがみ、明治二十九年(一八九六)河川法、同三十年には砂防法と森林法を制定し、ようやく国土保全の基幹法律を整備して、無謀な森林伐採などに歯止めがかかることになった。総括すると、六甲山系の歴史は大災害の繰り返しと、それに対抗する治山治水の歴史でもあった。

三 六甲山系のはげ山状況

六甲山系のはげ山状況を示した

絵図や写真あるいは記事などの資料は枚挙にいとまがないほどである。それらの中から数個を選出して紹介する。なるほど六甲山系ははげ山であったと理解いただけるであろう。

(一) 江戸時代末期、文久年間(一八六一〜一八六四)に描いた「文久年間兵庫及神戸之図」が残っている。これを見ると神戸の背山六甲山系はほとんどはげ山として描かれ、緑の森林がある場所はごく一部にすぎない。

(二) 明治十四年(一八八一)牧野富太郎は東京で植物学の研究を志して、郷里高知から船で上京する途中、神戸港に立ち寄った。その時見た六甲山系の様子を次のように書き残している。「高知から蒸気船に乗って海路神戸に向かった。私は生まれて初めて蒸気船というものに乗った。(中略) 私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。土佐の山には禿山など一つもないからであった。」牧野氏は露出した白い花崗岩の山肌を雪と見間違えたのである。

(三) 明治十六年(一八八三)政府



今日の布引の滝とその周辺。明治32年この地を視察した本多は「これは地獄谷だ！」と絶叫した。

から派遣されて兵庫県を視察した地方巡察使、植村正道は「兵庫県管内巡察記」の中で「六甲山地から土砂が流失して、山は骨と皮だけになっている。その骨と皮も崩れつつある」と書き、河川の氾濫の恐れがあるため砂防植林が必要であると書き残している。

(四) 明治三十二年(一八九九)本多静六は布引水源地を視察した。その時の現状を「我国地方の衰弱と赤松」の中で次のように述べている。「森林は乱伐による地力の衰えとともに、第一期・第二期と悪化して行くが、荒れ果てて丸裸になったあの瀬戸内地方の山々、ことに早くから開けた地で濫伐暴採も早くから行われてきた

神戸、岡山付近の諸山の現在は、もはや第二期の変化は終わって、第三期の惨状を示すものが多い。あの再度山や鉄柵山の松は、百数十年にもなるのに、人の背、腕の太さほどにもならず、地面はほとんど露出して水源全く涸れ、降雨のたびに土砂を流出し、河床はますます高くなり、洪水旱魃の害は年々ひどくなるばかり」と述べている。

(五) 明治三十五年(一九〇二)一月、布引水源地の現地調査をする本多静六に同行したドイツ人講師K・ヘフェレ氏(Karl Hebele)は「これほど荒廃した山は世界中探しても類がない。万国博覧会にでも出展したらどうか」と酷評したという。一方、神戸市の水道水源地の調査を依頼されたヘフェレ氏は、修法ヶ原の山肌を見て、「水道を敷設して市民の衛生を守るのも大切であるが、この山の荒廃は見るに耐えない。これを救うのが先ではないか」と治山の緊急的必要性を指摘した。このヘフェレ氏の助言で神戸市長坪野平太郎は砂防造林を緊急課題として取り組むことになり、同三十五年六甲山系の治水の調査、設計を本多静六に

委嘱することになったのである。

(六) 明治三十五年十一月十六日付「神戸又新日報」は布引貯水池の集水域である再度山付近で植林事業が開始された直後の様子を次のように報じている。「…更に進んでいわゆる中一里山に到れば、山の状況真に寒心すべきものあり、再度山の後方一帯の連山は全面赤砂にして、一草一木の見るべきものなく、岩石骨を露にして諸処に黒色を点綴するあるのみ、さながら一小砂漠なりき、砂漠は外



本多の計画で植栽したアカマツ林(再度山公園)

国にありと聞けるに神戸の直ぐ後方に之を見んと思ひも寄らざりしなり。秦の始皇帝怒つて某山を楮(裸)にせしとあるが、是は主権者の権威に非ずして永遠の長計なき市民と当局者が、自らその山を楮にせるなり。濫伐の弊怖るべきかな」

四 坪野平太郎と本多静六との関係

武蔵国(埼玉県)の男が摂津国(兵庫県)の六甲山系の緑化にかかわることになったのは、神戸市長坪野平太郎との出会いがあったればこそである。その出会いとは次のようである。坪野氏は本多より七歳年長(安政六年生)であり、東京帝国大学法科を卒業したが、健康を害して房州(千葉県)館山で病氣療養に努めた。その後三十歳になって、明治二十三年(一八九〇)本多らと共にフランス船で欧州への留学の旅に出た。同船に八人の日本人が乗船したが、三等室客は本多だけであった。一等二等室客は貴族のような待遇を受けるが、三等室客はまるで牛馬のような扱いであったという。

本多の航海日記によると、食事が劣悪なだけでなく、部屋は機関室の真上にあつて、ピストンの音で眠ることもできない。さらに、ネズミや南京虫の襲撃を受け、船酔いで吐き続けても誰も介抱してくれる者もなく、一人ぼっちで四十日間の地獄の航海であった。

こんな苦境の最中に一等船室からやって来て、本多を元気づけてくれる一人の日本人がいた。その人こそ坪野平太郎であった。彼は

本多の手帖に「望みある身と谷間の水は、しばし木の葉の下を行く」という一句を記して本多を励ましてくれた。本多はこのことが骨身に浸みるほど嬉しかったとみえて、後年彼が書いた多数の諸書の中に紹介してある。生涯忘れ得ない出来事であった。二人の間には固い友情が芽生えて、生涯に渡って信頼関係が続いた。

坪野氏はこのように人情深い高潔な人格者であったから、欧州から帰国して官職や銀行役員などを

経て、四十二歳の若さで第二代神戸市長に就任した。当時神戸市は港町として急激に発展して、公共施設が追いつけない有様であった。前述したように、六甲山系は広範な山崩れが発生して、住民の生活は難儀していた。これに追い打ちをかけるように、コレラや伝染病が発生して多くの犠牲者を出し



日本最大級の樹木園。再度山の北部にある。

た。この原因は上水道が整備されていないことにあるので、早速水道水源地の保全と集水地になる水源林の造成を急いだのであった。

坪野氏が市長に就任する前年、明治三十三年(一九〇〇)本多は教授に昇格し、活発な教育研究活動に従事していた。坪野氏は本多に神戸の現状を知らせて、協力を要請し、本多もまた六甲山系のはげ山の砂防造林を約束した。以上が本多が六甲山系の緑化にかかわることになった発端である。

坪野氏は約四年間市長として在職した後、山口高等商業学校(現山口大学)校長に就任し、さらに明治四十四年(一九一〇)東京高等商業学校(現一橋大学)第十六代校長に就任した。しかし、健康を害したため三年数ヶ月で辞職して、再び房州館山で療養にあたる一方で、東京小石川に「安房育英会」を設立して、安房出身の学生を援助した。ところが、大正十二年(一九二三)関東大震災に出遭ったので再び神戸に転居し、大正十四年この地で永眠した。享年六十五歳であった。墓は房州館山市内の慈恩院にある。

(以下次号)

日本一の山茶花と本多静六

久喜市文化財保護課 渋谷克美

本市で行っている本多静六顕彰事業の新聞記事をお読みになった茨城県境町の関吉三さんから、「本多博士が自宅の山茶花を調べた記念碑があるので見に来ませんか」と声を掛けて頂いたのは平成二十五年一月二十三日のことでした。一週間後、早速自宅に伺い記念碑を見学させて頂きました。

残念ながら、当の山茶花は昭和二十年頃に枯死したようで、現在は石碑のみが残っていました。石碑は二mを超える大きなもので、表題には「日本一大さざんくわ」とあり、昭和九年十月二十一日に本多静六が実地調査に訪れたことが記されています。碑文には、

幹周や枝数のほか樹勢が盛んであること。大きさ的にも日本一の山茶花である旨が刻まれています。

また、関さん宅には当時の新聞記事も残されており、本多静六の署名記事もありました。記事には「茨城県



「日本一大さざんくわ」と本多静六 (関家所蔵)

猿島郡静村に山茶花の珍しい大木があるという耳よりな知らせが届いて来た。もともと老樹について深い興味を持っている自分は大喜びで、早速一ツ橋伯を写真技師にお願いして十月二十一日(日曜日)の秋晴を幸いに出掛けた。(中略)この山茶花は少なくとも八百年以上の歳月を経るものといわざるを得ない、つまり山茶花としては之が日本一の老大木なりと断言して憚らないものである。こうした思いがけない所に在る巨木名木はどしどし世間に紹介せられ、今後何時迄も大切に保残せられん事を希望してやまない処である」と締めくくっています。

今回貴重な情報をお寄せ頂いた関さんに感謝申し上げます。

第五回本多静六賞 受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課

主査 石橋弘樹

一 第五回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。

第五回本多静六賞については、計十二件の応募があり、「県立浦和高等学校同窓会」が受賞されましたので御紹介します。



浦和高校同窓会の皆さん

二 浦和高等学校同窓会による 「浦高百年の森づくり活動」

「浦高百年の森」は、浦高の創立百周年を記念した事業で、環境教育につながる緑の森づくりを行うものです。

寄居町風布地区の民有林約五ヘクタールを土地所有者から五〇年間借り受け、地元の協力会や寄居町、また現役生との協力や連携のもと、平成十七年に記念式典と記念植樹を行い、高校同窓会では全国初のケースとなる森づくり活動をスタートしました。



「浦高百年の森」全景

現地は放置され荒廃した二次林でしたので、同窓会では、百年かけて森林を再生する方針のもと、九つのゾーンに区域を分け、既存の広葉樹林を残しながら、新たにカシやヤマザクラ、コナラなどの広葉樹とスギやヒノキ、アカマツなどの針葉樹を区域ごとに分けて植栽・整備するランドデザイン

を作成し、将来をしっかり見据えた計画的な森づくりを行い、森づくりのモデルケースを目指すこととしました。

また、区域の中にログハウスを建てた「体験の森」を設け、若者たちが自らの活動を通して、水源の森の大切さや、森を育てることの苦労と喜びを経験できるように設定しました。

これまで七年間にOBを中心に家族や友人、現役生を含め、延べ二五四人の参加者が、計二四七三本の苗木を植栽し、下刈りや除間伐などの保育作業を行いました。

浦高同窓会では、このような活動を通じて荒川上流の森を再生し



下刈りの様子

郷土の環境保全を図るとともに、植生の変化などを記録して地球温暖化の影響などの調査・研究も行っています。

なお、これらの事業にかかる資金はすべて同窓生の寄付によって賄っています。

「浦高百年の森」は、学校同窓会による森づくり活動の先駆けとなり、県立浦和第一女子高校や県立熊谷高校、県立秩父農工科学高校、県立川越高校など埼玉県内の他の学校同窓会でも森づくり活動の取り組みが始まり、活動の輪が大きく広がっています。

三 本多静六賞表彰式

表彰式は、平成二十四年五月二十日に春日部市のウイング・ハット春日部で開催した埼玉県植樹祭の中で行い、上田知事から川野同窓会長に表彰状と賞金が贈られました。

四 終わりに

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいます。引き続き皆さんの御理解・御支援をお願いいたします。

本多静六博士の胸像製作で学んだこと

荻野敏雄



本多静六博士の胸像（久喜市立三箇小学校）

粘土で考える。それで頭が暇になったそんな時、土は形を変えながら色々なことを思い出させてくれるのです。

胸像・記念・永遠・無常
連想が次第に自問自答のようになり、何とかつじつまを合わせて納得させようと努めています。

造形的な仕様が決まり、肖像を制作する者の常として、博士の人格を熟知するようにとお借りした博士の著書数冊を読み始めました。「わが処世の秘訣」など。

博士の人柄の追及は、いつか私を愛読者にそして崇拜者に変えてしまいました。

崇高な人柄と偉大な足跡・崇高な容貌、全く仕事冥利につきると。多くの著書と万里を旅した恐るべき偉人、教訓は納得出来ても実行にはほど遠い存在と知りました。

博士の塑像もほほ姿になってきて細部の制作になった時、やはりおほろげでも横顔の資料が欲しかった。鼻柱のしっかりしたお顔だが、ややユダヤノーズにも見える、いやノースマン？、やはりモンゴリアンノーズ？、額は？、後頭部は？、まったく想像の制作でした。

第一作の除幕式後のレセプションの折、ふと気づくと本多健一博士が私の席の傍らにお立ちになっておられ「蘇ったようにお作りいただき有難うございました」と丁寧なお言葉をいただきました。何となくご挨拶を控えていた失礼もあり恐縮しましたが、儀礼と知りつつも、出来栄えに少し安堵しました。

博士の眼差しは、永遠の美德を称えて静かに遠くを見ている。私はその全人格をこの塑像へ刻みこみ、この記念像を見て博士の教えに感動し実践する人材を一人でも多く世に送り出せたらと念じつつ。

ご指導ご協力いただいた多くの方々へ感謝しつつ製作にあたりました。



埼玉県森林科学館での除幕式のようす

菖蒲町美術協会が誕生して十数年、菖蒲の人達とも親しくなり住人の一人として町づくりに参加してきたら、時には思うようになってきた頃、願ってもないような期待が私に寄せられていました。

本多静六博士の記念像制作の計画について、依頼のお話をお聞きすることになりました。

そんな大事なことをなぜ私と想いつつも、造形は私の天職と自負する一面の性癖もあるので、町民の一人としてお役にたつならと軽い気持ちでお受けする気になり

ました。

制作にあたっての手順どおり肖像写真等で像の設定を進めるうち、白髪を蓄えた一瞬レオナルド・ダビンチの自画像を思わせる高雅な肖像写真が関係者ともども制作イメージで一致しました。

荒い印刷写真で、イメージはあってもディテールは無く、他に何点かあっても年齢差があり、制作するには、データ不足のプロジェクトになりました。

彫塑の制作の場合、土を置いてみて取ってみて検討する。つまり

本多静六博士の体験談から 静六博士の簡素生活

本多静六博士を顕彰する会

柴崎 一

静六博士は八十五年の生涯において、世界を含め多くの人との交流や見聞をとおして得た体験から、一身一家族の生活を改善する必要を感じ、その信念を「簡素生活」として、次のように述べている。

「人生の幸福は、束縛された形式上の生活ではなく、自由な生活、人手を借りない生活、すべてを自分の努力によりやっていく生活である。」

では、簡素生活とはどのようなものなのか。

衣と社交

冬季の外出は、当時の寒さからオーバーコートは必要な防寒着であったと考えられるが、静六博士は夏用のレインコートを四季を通じて着用するという。その理由は、「分厚いコートは、汗をかくて風邪をひく原因になる。」ということから下着はメリヤスやチヂミを半ダースずつ購入し、寒さによって二枚、三枚と重ね着をし、登山

の折に着替える方法、つまり一番下の汗をかいたものを一番上に着替えることで、風邪を予防する博士流の秘伝だという。

社交上では、形式的なことは一切捨て、実意を伝える方法をもって相手方に快感を与え、決して迷惑をかけることを主義としていた。つまり、形式的虚礼は一切やめるかわりに病気や不幸などのあった場合には、率先して可能な限りの協力をすることである。

また、日常、自分自身も喜ぶ物で、貰った人も喜びそうな贈物を戴いた時には、福分けをすることを心がけているという。この場合、配慮しなければならぬことは、目立たぬような荷造りにして「○より到来に任せ、少しばかりお目にかけます。」と言って届ける。

このことで相手方は、感謝を表すための苦痛がなくて済むからである。「感謝は物の乏しき時にある。」という言葉があるように沢山戴いた時には、福分けをするところが自分も他人も幸に貢献することになる。

祝い事は天ぶらの会

結婚式なども華やかな披露は、自分たちは勿論のこと、来客に対しても大変な経済的負担をかける

ことになり迷惑である。そこで、本多家では、博士が執筆した本が出版されると、助手や親友諸氏を招待し、出版記念パーティー（天ぶらの会）を開くことになっていた。

私の○が何某と結婚いたし、ご披露申し上げるべきところ、かえって心配やご迷惑をおかけしてはと存じ、この天ぶらの会を好機に、皆さまに新夫婦をご紹介申し上げます。何分よろしく。」このようなことで済ませるとのこと。要は冠婚葬祭で迷惑をかけない。

嫁入り支度については、当人に希望一覧表を書かせ、当面必要とする物のみを購入し、それ以外は預金通帳で渡すとのこと。特に洋服などは常に流行がついて廻っているし、狭い家では家具など格納場所がないなどを考慮し必要最小限にとどめるよう考えてのことだそうである。

仏事について

儀式は極めて質素に、供物は一切お断りし、準備した資金で、もしも残金が出た場合、すべて公共事業に寄附するという。

博士の両親が亡くなった時には、奨学基金として条件つきで区役所に寄附したそうである。

その条件とは「基金の利子の四分の一以上を毎年基金に組み入れ、その残金を奨学に供するよう。」という内容だそうである。

ある時、孫達が小学校で大お爺さんの記念の褒美を貰ったと言って喜んでいた様子に、長く亡き人を思い出すようになったそうである。

食について

当時の本多家の食事は玄米（三分搗^{ぶき}）、味噌汁、菜食が主で魚肉などご馳走は他から戴いた時に限る。家族が仕事に精を出し、空腹で食するのでもまずいものがなく、すべて栄養になるそうである。

昔から日本人は玄米と野菜類のみで生きてきた事実があり、栄養価値においても玄米は魚肉以上の栄養を含んでいる。これに副食に胡麻塩、漬物、野菜、味噌汁等の塩辛いものが玄米の甘味を生かすのだと言う。

散髪は奥さん床屋で

博士は二十五歳時より自宅で五十余年間、週二回奥さん床屋で一分刈にしていたそうである。Yシャツも上衣を詰襟で通すので殆んど着ない。よって、生涯の散髪代、洗濯代の節約分は数千円になるとの試算である。

日比谷公園を訪ねて

齊藤勝雄

三度目の正直でやっと抽選に当たり喜んで参加しました。

九月二十日八時三十分、一行二十五名は市役所を出発し、配布された資料で車中学習しながら日比谷公園に向かいました。

出迎えてくれたのは何と隣の白岡市出身、元公園事務所所長の高橋裕一さんでした。

プラタナスの木陰で本多静六博士と公園の関わりについて、その後園内の主な施設の案内をして頂きました。

まず第二花壇の話聞きながら心字池を通り、第一花壇の広場で野外音楽堂や大噴水についての説明を聞きました。

折から全国都市緑化フェアの開催準備で混雑している所を通り、松本楼の前で有名な首賭けイチョウと対面しました。

日比谷通りの拡幅で、伐採処分中の老イチョウを見た博士は、公園内に移植しようと思ひ、東京市参事会議長にかけ合ったそうです。運搬、活着を憂える議長に「私の



小音楽堂前で説明を受ける参加者

明治神宮の森を訪ねて

近藤敏郎

明治神宮では社務所の研修室に案内され、沖沢先生から神宮の来歴と神苑について説明を頂き、各人イヤホンを装着して森の学習に出かけました。大木、小木が林立し鳥の声も賑やかな森を歩いていると何処でも先生の声が聞こえます。

本多博士が一番苦勞されたことは、時の総理大臣大隈重信公から杉や松を主木とした莊嚴な森造りをするようにとの提言があり、杉が代々木の風土に合わない事を承知の本多は、総理の考えを改めさせようとあらゆる手段を講じたが容れられず、遂に近くの杉を切り倒し、解剖実験を見せて口説き落としたと言う博士の確固たる信念に感動しました。歩きながら、草や木、鳥について興味深く話してくださいだったり、質問にも面白く易しい話でなごやかな散策でした。

森は都市公害に耐えられるよう常緑広葉樹のシイ、カシ、クスノキを主木とした植栽設計ですが、その裏には、きめ細かい工夫が組

み込まれている事を聞き、驚くばかりでした。例えば病害虫の伝染を防ぐために同種の木を隣り合わせにしない事が、かえって異なる緑の色合いを楽しめる様に配列されていると聞き感心し、改めて実感しました。

こんな森にどうしてキュウイやカラスウリをそのままにしているのかと聞いてみると、これが森の自然の姿で天然更新の基本であると教えられました。正に森には人工林の気配はなく、厳粛で淋しささえ感じられます。神宮の森にはこんな深い意味のあること、これを守り管理するご苦勞に感謝しながらゆかりの地訪問研修が終わりました。



明治神宮本殿前

（本多静六博士の森だより）
森の便り その二 エノキ（榎）

本多静六博士を顕彰する会

小山千秋

私はエノキです。皆さんとの縁（ゆかり）については、親から教えられていきますのでお話しします。

私が本多静六博士の森に植えられたことは、一門の名譽であり、感謝に耐えません。江戸時代に、日光御成街道の一里塚に植えられた子孫が今も隣の白岡市内に史跡として残されています。

私は小枝が多いので枝の木、エノキと言われ、小正月（一月十五日）には、繭玉団子を挿して神様に供え蚕の豊作を祈りました。枝は生でもよく燃えるので、燃えの



矢印のところにホオジロの巣

なつたというお話もあります。私は国蝶オオムラサキの食草（飼）です。私以外は食べませんので、私の養育の義務があるのです。ところで森に珍しい事が起こ

木と言われエノキに変わったとも聞いています。また、その煙が目に優しくて、この木で沸かした風呂に入ると中風（脳血管障害）にならないと言われていました。

また、鬼門（悪魔の通り道）除けの木として家の戌亥（西北）の方向に植えられ、街道から家に入る標の木に植えたので角（かど）の木とも言われました。何故か私は成木になると幹に横じわが現われ、老木になると瘤（ぶこ）が出来るのです。

昔、浦島太郎が竜宮城からの帰りにこの木の下で休み、おみやげの玉手箱を開けてしまいました。太郎は忽ち（たちまち）お爺さんになり、顔中皺だらけになってしまいました。太郎はこれをむしり取り、木に投げつけました。これが木の瘤になつたというお話もあります。



ホオジロの卵

りました。昨年こんな小さい私の仲間に鳥が巣を作り、子が巣立つて行き、落葉してから空巣が発見されました。今年私の懐に営巣し、四個の卵を産みましたが、二個は抱卵中に不明となり、二羽の雛（かえ）が孵り（かえ）巣立っていきました。会員で野鳥愛好家の岩崎喜一さんより、ホオジロと確認されました。

何で私みたいな若木の、しかも地上一メートル位の所に巣作りするんだらう。岩崎さんにお聞きするとそれがホオジロの特異な習性ですと教えて頂きました。人にも気付かれず、上空からの天敵にも見え難く、攻め難い所を選ぶ隠れ忍術で子どもを守るのです。

隣のクヌギさんにも昨年から足長蜂が巣を作りましたが、管理の人に取られ、今年もまた同じ木の同じ所に作りました。余程気に入りの場所なのでしょうが、森の安全管理上取り捨てられてしまいました。私たちの森には、コガネムシ、ルリハムシ、アブラムシ、イラガ、モグラ等が住み、生物多様性の環境が整いつつあります。私たちは早く大きくなり、花、実を着け鳥や虫を始め多くの生物が集まる楽しい森造りに励んでいきます。

ちなみに植えられて五年経ちましたが、早々と花を咲かせ、実を結ばせているのはガマズミ、エゴ、ミズギ、クヌギさんの四家族です。みんなが、当時植えてくださった三箇小学校の皆さんとお話をしたいと言っているんですよ。

このようにして森の木は成長を続けながら、新たな問題を提示してくれます。

したがって私たち人間は、木と向き合い話し合いの上、十年、二十年先を見ながら安全で適切な育林、管理をしていかななくてはなりません。

役員研修

秩父・大血川演習林と彩の国 ふれあいの森を視察して

岩崎喜一

平成二十四年十月十九日、埼玉
県秩父方面に東京大学演習林と県
有林について、十九名が参加し、
次のとおり視察研修を実施しまし
た。

(一) 東京大学秩父演習林

大正五年に温帯(冷温帯)地域
における本学農学部附属の教育試
験研究施設として、埼玉県秩父市
内荒川源流の民有林(六千ヘク
タール余)を購入し、昭和十七年
に飛地二百ヘクタールを東京高等
農林学校(現東京農工大学農学部)
に移管するなど地籍の変換があ
り、平成二十二年現在の所管面積
は五千八百十二ヘクタールとなっ
ています。

林地は秩父市街から西方二十二
キロメートルに大血川地区(九百
三十二ヘクタール)と、同じく西
方四十キロメートルに栃本地区
(四千八百七十五ヘクタール)の
二団地を有します。

地況は、関東山地のほぼ中央部
荒川源流域にあり、荒川、笛吹川
(富士川)、千曲川(信濃川)、三
川の分水嶺甲武信岳(二四七五
メートル)を盟主とする奥秩父連
邦二千メートルクラスの高々に囲
まれています。

林況は、創設当初、炭焼きなど
の広葉樹伐採跡地とそれに類する
区域が二千ヘクタール、人手の入
らない原生天然林が約三千八百ヘ
クタールで、人工造林地は、僅か
な面積でしたが、現在は人工造林
の面積は全体の十三%、天然林が
八十六%となっています。

(二) 大血川演習林

一行のバスが到着すると、演習
林の相川専門員の出迎えを受け、
早々にヘルメットを着用し、入山
の説明を聞き、入口の向岳橋に向
かいました。

広い登り坂の林道に相川さんを
囲み、山の話、木の話聞いては
いつの間にか木の虜(とら)になっていま
した。

大血川に注ぐ溪流と鳥の声は、
一際けたたましく、探鳥も格別で
す。木漏れ日の壮快さを満喫し、



管理事務所長(左から2人目)から説明を受ける

演習林の話聞きながら、ケンカ
平の下まで進むと、シオジ、カツ
ラの大木に出合いました。
相川さんは「皆さんが行かれる
中津の奥には、これらの天然林が
あります」と言い、更に生態や特
性は詳しくお話を頂きました。
研修はここで終わり、各自入口に
戻り解散しました。
中津へ向かう途中、神庭(かじわ)で昼食
をとり休憩しました。

(三) 彩の国ふれあいの森

滝沢ダムから国道百四十号を離
れ、中津川に沿って彩の国ふれあ
いの森に向かいました。峡谷も次

第に深くなり、色づき始めたモミ
ジが紅葉の絶景を思わせます。

この県有林は本多博士が寄附し
てから八十余年経ち、秩父の市街
地から四十キロメートルに位置
し、標高六百メートルから二千
メートル級の山々に囲まれ、荒川
源流域の水涵養と県土保全の保
安林としての役割を担う重要な森
林であります。国立公園にも含ま
れて、スギ、ヒノキ、カラマツの
人工林とシオジ、カツラの自生す
る秩父固有の原生林が残されてい
ます。

そんな中に造られた森林科学館
や宿泊施設のこまどり荘は、山、
森の学習、体験、遊び、くつろぎ
の場として整備されています。

管理事務所に着くと所長さ
んと大滝の古老山口喜三さんに迎
えられ、所長さんから館内の案内
と県有林の状況について、山口さ
んからは、旧大滝村と本多静六の
詳しいお話等を頂き、小生も感動
しながら聞き入りました。

今日一日の研修も終わり、今、
私達が手入れている「本多静六
の森」を思う時、労を惜しまず、
皆で汗を流してやろうという気持
ちになりました。

本多静六博士没六十年 顕彰事業「記念切手」発行

顕彰する会広報部

静六博士が昭和二十七年一月二十九日に享年八十五歳で亡くなられてから、平成四年には没後四十年を記念して「本多静六博士を記念する会」が発足し、博士の情報発信組織としての役割を担いつつ、顕彰する事業を推進してまいりました。

その顕彰する事業の大きな柱の一つが現在二十一号を発行する「本多静六通信」であります。

十年後の平成十四年には没後五十年を記念して「日本林学会の巨星本多静六の

軌跡」とあわせ、小学生向けの副読本的性格の「日本の公園の父本多静六」を発行し、情報発信組織として確固たる基盤を築いてきました。

平成十九年七月には、この組



記念切手シート

織を更に強固に、しかも全国的なものに発展させるべく組織名称を「記念する会」から「顕彰する会」に改め、会則を定め顕彰事業のあるべき姿を確立し、これを推進することといたしました。

このように、組織を充実発展させ顕彰事業を進めてきたところですが、平成二十四年には没後六十年を迎えることとなりました。ここに、改めて博士の偉大なる功績に思いをはせ、その遺徳を後々までも伝えるべく、顕彰する会として「顕彰記念事業」を企画し、これを実施に移すことと致しました。

事業としては、多くの人に静六博士の人となりを知って頂くため

に、簡単で分かり易いパンフレットの作成発行に向け準備を進めていくところですが、更に静六博士の肖像写真入りの記念切手シートを発行することと致しました。これによって、更に多くの人に静六博士を顕彰していただけるよう願っているところです。

切手シートの構成につきましては、静六博士の肖像写真入り八十枚綴（写真参照）を郵便事業会社に依頼し、原価千二百円にて作成することができました。

静六博士没後六十年の記念すべき年の顕彰事業に、広く多くの方のご理解ご協力をいただけますようお願いいたします。

（文責 柴崎 一）

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさらに充実させるため、一緒に活動していただく会員の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

入会受付…随時

年会費…個人会員1,000円

団体会員5,000円

問合せ…本多静六博士を顕彰する会窓口

編集後記

遠山先生には六甲山系の復興にかけた本多博士のご苦勞とゆかりについてのご高説を賜わり、巻頭を飾って頂き誠に有難うございました。

あの震災から間もなく二年が経ちます。伐採されてしまったものの市民の心の支えとなっていた陸前高田市の一本松。木の生命力を改めて感じさせられました。

一方、聞くに忍びない事実が、樹齢数百年の神社のヒノキが除草剤の注入で枯らされ、材木市場で取り引きされたと言う報道を目にしました。

本多博士は百年先を見据えた森造りを教えて下さいました。私たちはこの教えを守り、次代を担う三箇小学校の皆さんと卒業生の方々に期待しています。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会
《窓口》

久喜市役所企画政策課

〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-3

電話 0480-22-1111(代)

久喜市菖蒲総合支所総務管理課

〒346-0192 埼玉県久喜市菖蒲町新堀38

電話 0480-85-1111(代)